

| 図書名          | 受験番号 | 氏名 |
|--------------|------|----|
| たったひとつのたからもの |      |    |

テーマ「余命一年と宣告された秋雪くんを通して分かったこと」

この本に登場する加藤秋雪くんは、生まれてすぐに重い臓病を宣告され、ダウン症ということも医師の診断により判明したという男の子のことだ。そして、生後一ヶ月で「余命が一年だ」と宣告されたにもかかわらず、六歳まで生きることができた。

秋雪くんは体が弱く風邪をひいたら致命的だと医者からは言われており、お母さんは、秋雪くんを外に出して、菌を移してしまわないかとても不安にしていた。しかし、いずみの学園という発達に遅れのある子どもを対象とした、療育の場であり、親子教室と機能訓練をしている通園施設に通うことをお母さんは決めた。不安な気持ちが消えないままの入園をしたが、秋雪くんの体のことをきちんと理解をしたいということで診察を受ける時に、二名の先生が同席してくれたという。この時、ここまでしてくれるんだと先生の優しいサポートにお母さんは安心したようだ。

お母さんとお父さんは秋雪くんを自分達の好きな場所に行かせることで幸せや嬉しさを感じていた。山に行ったり、海に行って自然と触れ合ったり、通園施設に通わせていろんな子どもたちと遊んだりすること、新しく覚えることや、楽しむこと、興味が湧くものができて、秋雪くんにとっては生きる楽しみが増えるだろう。

本の中にある言葉で「人の幸せは、命の長さではないのです。」というものがあつた。その言葉を見て、だらだらと長く生きることが「幸せなのではないか、例えば命が短かくても、どれだけの精一杯、一生懸命に生きて、一日一日を大切に楽しく元気に生きることができるとかが大切で「幸せなのではないか」と感じた。どうなるか分からない未来に悩むのではなく、今を楽しく元気に生きればそれが「幸せなんだ」ということに気づくことができた。

そして、この本を通して、いろんなことを知ることができた。まず、親を安心させることのできる保育士、先生になること。小さい子どもは、とても活発に動くので、いつもけがをしないかお母さん方とても心配だと思う。障害を抱えた子を持つ親は、病気に感染しないか冷や冷やしている。このような心配を少しでも和らぐように私が子ども達についてよく知り、注意をしていきたい。もう一つ、子どもの伸ばしてあげなければいけない部分をどれだけの伸ばせるか。運動会や発表会などを見て、親に子どもの成長を喜んでもらえるようにしたいと思う。私も保育士になる際にはこの本、秋雪くんを通して分かったことを忘れずに子ども達やお母さん方と接していきたい。